

一八八三年四月八日(日)

タクール、聖ラーマクリシュナ、信者たちと共にドツキネーシヨル南神寺院ドツキネーシヨルにおいて

——アダル・セン氏と二度目の会見

マニラルのカーシーへ行つた話

校長は今日また、タクール、聖ラーマクリシュナをドツキネーシヨル南神寺院にたずねて行く。あの方は、馴染みの信者たちにとり囲まれてどんなふう楽しく過ごしておられるか、神を想ってはどんなふう三昧に入られるか、見に行こう。ある時は三昧境に入り、ある時は歓喜に酔つて讚神歌をうたい、またある時はごく普通の人のように信者を相手に話をなさっている様子を見に行こう。口にするのは神のことばかり、心は常に内を見つめ、動作は五才の子供のような御方——。息をするたびに大実母の名を称えていらつしやる御方——。偉そうな素振りは全くなさらず、五才の子供のように話したり動いたりなさるのだ。五つになつたばかりの子供は世間のことに全く無執着で、いつも嬉しそうに素直で単純、正直で明けつ広げである。先ず一番の言葉は、ク神様だけが真実在——ほんとにある。ほかは皆、非実在——その場かぎりのアテにならぬもの。さあ、あの神の愛に酔いしれた子供に会いに行くのだ。

偉大なるヨーギー！ 無限の大洋の岸边を独り、かつ歩いていらつしやるのだ。あの無限のサッチダーナンダの大海の中で、何かを見つめていらつしやるようだ。それを眺めては、聖なる愛に浸りきつて、悠々とかつ歩いていらつしやるのだ！

今日はチョイトロ月の白分一日、日曜日。昨日の土曜、新月の日にタクールはバララムの邸に行つておられた。新月——底知れぬ闇の中、大実母はただ独り、マハーカラと交接している。それでタクールは、新月の日にはじつとしていらつしやる事ができない。だから、子供のような状態なのだ。終日、宇宙の大実母の姿を見つづけ、大実母なしには何ことも進行しない——マの子供なのだから。
(訳註、マハーカラ——終わりなき時・時間の子宮、絶対神シヴァ)

今日は日曜日、キリスト暦一八八三年四月八日、チョイトロ二十六日の朝方、タクールは、子供のように坐つておられる。そばに一人の青年信者ラカールが坐っている。

校長は部屋に入ると床に額ずいてごあいさつをした。タクールの甥ラームラルもいたし、やがてキシヨリーをはじめ数人の信者が集まつてきた。ブラフマ協会の古い会員であるマニラル・マリツク氏が出て、タクール、聖ラーマクリシュナにあいさつをした。

マニ・マリツクはカーシー(ベナレス)に行つてきたところである。彼は実業家で、カーシーにも彼の屋敷があるのだ。

聖ラーマクリシュナ「ふーん、カーシーへ行って、誰かサードウに会つたかい？」

マニラル「さようでございます。トライランガ・スワミ、バスカラーナンダ、こういった方々に会つ

てまいりました」

聖ラーマクリシユナ「どんな様子だったか話して聞かせろ」

マニラル「トライランガ・スワミは、まえと同じ社やぶらにおいででございました。マニカルニカガ沐浴場バトのベニマードヴァの傍の——。人の話によりますと、この方は、以前はたいそう高い境涯におられて、不思議な行いがいろいろとおできになったそうでございますが、今はさほどでもないようだというところで——」

聖ラーマクリシユナ「みんな、俗物のいうことだ」

マニラル「バスカラーナンダは誰とでも交際なすつておいでして、トライランガ・スワミとはちがいます。あのかたは決して口をおききになりませんが——」

〔悟った人にとっては、神のみが行動者、悟らぬ人には善事と悪事——フリー・ウィル(自由意志)〕

聖ラーマクリシユナ「バスカラーナンダとお前、どんなことを話した?」

マニラル「さようでございます。いろいろなことを話しました。そのなかには善と悪についての話もございまして! あの方が申されるには、悪の道を行くな、悪を思うな。これが神が我々に求め給うすべてである。善徳を積むように心がけてあらゆる行いをせよ」

聖ラーマクリシユナ「うん、それも一つの方法だ、世俗の人に説く道だ。靈性が目覚めた人たち——神のみが真実在で、他のすべては空しく無常である、ということがわかった人たちにはまた別の

考え方があつた。こういう人たちは、神ひとりが行動者で、他のすべては行動しないもの、ということを知っている。靈性が目覚めた人たちは、間違つた方へ足を踏み入れないよ。これは悪いか悪くないかなどと、いちいち見積る必要はない、神様が大好きな人はやることなすことみんな善いことなんだよ！もつとも、こういう人たちは、この仕事をしているのは私じゃない、私は神様の召使いなんだ、とちゃんと心得ている。私は道具、あの御方が使い手。あの御方がおさせになる通りに私はする、言わせなざる通りに私は言う、あの御方が進ませなざる通りに私は進む、というわけだ。

靈性が目覚めた人たちは善と悪を超えている。神お独りひとがあらゆることをなさるのだ、ということを知っているからね。ある処に僧院があつた。その修行僧たちは毎日托鉢に行く。ある日、一人の僧が托鉢していると、地主が一人の男をこつびどく打ちすえているのに出くわした。その僧はたいそう慈悲深かつたから、仲に入って地主にもうやめてくれるように頼んだ。邪魔された地主はカツとして、こんどは僧の体に怒りをぶつつけた。打ちかたが酷ひどかつたので、僧は氣絶して道端に倒れてしまつた。誰かが僧院に行つて、『あんたとこの坊さんが一人、地主にひどい目に遭わされているよ』と知らせた。修行僧たちが走つていってみると、仲間が氣絶して倒れている！五人で両手足と頭をかかえて連れもどり、一室に寝かせた。まだ意識の戻らない僧を四方からとり囲んでみんなは心配しながら坐つていた。誰かがウチワであおいでやつていた。なかの一人が、『牛乳を口にふくませてみたらどうだろう』と言つた。それで、口に牛乳を少しづつたらしめてやつているうちに、僧は意識を取り戻した。ほんやりと目を開けている。一人が、『ほら、ものがわかるかな？ 私たちがわかるだろうか？』

と言った。それで、大きな声を張り上げて質問してみた。「お坊さま！^{マハーラージ} あなたに牛乳を飲ませているのは誰ですか？」僧はゆっくり、ゆっくり、答えて言うには、「兄弟よ！ 私をぶんなくってくれたお方が、私に牛乳を飲ませていらつしやる』

神を知らない間は、こんなわけにはいかないがね」

マニラル「あなた様がいまお話し下すつたその人は、非常に高い境涯でございますなあ！ バスカラーナンダとは、このほかにもいろんなことを語り合いました」

聖ラーマクリシュナ「どこかの家に住んでおいでたかね？」

マニラル「ある人の家で暮らしていらつしやいました」

聖ラーマクリシュナ「いくつ位？」

マニラル「五十五、六才と見うけましたが」

聖ラーマクリシュナ「それから、どんな話をした？」

マニラル「私が、信仰は^{バクティ}どうすれば得られるのか、と質問いたしましたら、あの方は、称名しろ、ラーマの御名をくりかえして称えろ、とおつしやいました」

聖ラーマクリシュナ「そりや、いいことだ」

在家とカルマ・ヨーガ

寺院では、救いの女神バヴァタリニー(カーリー女神)、ラーダーカーンタ、および十二のシヴァの礼

拜が終わった。やがて、食事を供える儀式の鐘が鳴り出した。チヨイトロ月の（インドでは真夏）正午のことである。猛烈な暑さだ。今しがた、ガンジス河の満ち潮が始まっていて、南の方から風が吹く。聖なるガンガーの水は北の方へ向かつて流れている。タクールは食事のあと、すこし休息していらっしやる。ラカールの郷里はバシルハートのそばであるが、この地方は夏になると水飢饉でいつも苦しんでいる。

聖ラーマクリシュナはマニ・マリックに向かつて――

「ラカールが言っているが、あの地方は大へんな水飢饉だそうだよ。お前、あそこに貯水池を一つ掘ってやったらどうかね。そうすりゃ、どんなに人助けになるかしかないよ。お前はずいぶん分金持ちだが、そんなに金を持っていて何するつもりだい？ はっはっはっ。聞けば、油商人はえらく勘定高いそうだが、ワツハツハツハ」（信者たちも笑う）（訳註――マニラル・マリックは油の製造、販売に従事する比較的低いカーストに属していた）

マニ・マリックの邸はカルカッタのシンドリヤ地区にあった。シンドリヤ地区のブラフマ協会の集會は彼の邸内で開いている。ブラフマ協会の年祭の折りには、彼は大ぜいの人を招待する。タクール、聖ラーマクリシュナをも招待している。マニラルはバラナゴルにも一つの別荘を持っている。そこには彼は殆どの場合独りで行って泊まり、そこからタクールにお会いしに来るのである。マニラルが実際勘定高い人物であることはたしかだ！ バラナゴルに行くのに、初めから馬車を雇って行くということとはしない。まず路面電車でシヨババザールまで行って、そこから乗り合い馬車でバラナゴルへ向

かうのである。金に不自由のない人だ。数年後、貧しい学生たちへ衣食を給するため、二万五千ルビの基金を設立した。

マニラルは黙っていた。しばらくして、あれこれ話をした後で、話の途中で何気なく言った——
「せんせいは貯水池のことをおっしゃいましたが——ただ、それだけでよかったものを、どうしてまた、油売りの話などなすつたのでしょうか？」

信者たちは顔を見あわせて笑いをこらえていた。タクールもここにこしておられる。

トウキネシヨル 南神村における聖ラーマクリシユナとブラフマ協会の会員たち——愛の原理

やや経つて、カルカッタから数人ブラフマ協会サマジの年輩の会員たちがきた。そのなかの一人にタクルダース・セン氏がいた。部屋は大ぜいの信者たちでいっぱいになった。タクールは小ベツトの上に乗っておられる。にこにこ顔で、無邪気な子供のような姿で北を向いていらつしやる。そして、会員たちと楽しそうにしておられる。

聖ラーマクリシユナフレイマ「ブラフマ協会などの信者たちに向かつて」お前たちはよく愛(ビヤム)、愛(ビヤム)というが、愛フレイマというものはそんなに気軽に扱シラえる代物シラなのかい？ チャイタニヤ様デリアフレイマは愛を成就なすつたお方だ。ほんとの愛には二つの特徴シラがある。第一に——この世界のことを忘れてしまう。神さまを愛するあまり、外ホカのものは空になつてしまふのだ。チャイタニヤ様デリアフレイマは、森を見ればプリンダーヴァンだと思ひ、海を見れば聖なるヤムナーだと思つた（訳註——タクールは愛ハフレイマを「ビヤ

ムムと茶化して発音した

第二の特徴は——自分の身体は、そりゃ可愛いものだが、それにさえ少しも気を使わないようになる。つまり、この身体が自分だという感じが全然なくなってしまう。

神様と会わなければ、ほんとの愛は生まれぬ。

神をつかむときにはいくつの特徴がみえる。その人の奥の方から、神にあこがれる情熱が力強く表面にあふれ出ているようなら、もう間もなく神をつかむことができる。

この力強い情熱とはどういうものか？ 識別、離欲、生きものに対する慈悲、求道者への献身、

求道者との交わり、神の名と栄光をたたえること、真実の言葉を語ること、こういうものだ。

いま言ったような情熱の特徴が見えたら、神を見るのもそう遅くないとはつきり言える。旦那が用人の家に行くときには、その家の様子を見ればちゃんとわかるよ！ きちんとなっているからね。

先ず草むしりをする、煤はらいをする、ハタキをかけて下を掃く。旦那自ら、将棋盤やら煙草盆やら、いろんな品物を届けて下さる。人が来てこんな様子を見れば、この家に旦那が間もなくおいでなさるといふことがいやでもわかつてしまうよ！

一人の信者「仰せの通りです。——感覚が自制出来るようになるには、先ず分別しなければいけませんか？」

聖ラーマクリシュナ「それも一つの道だ——分別の道だ。信仰の道でも、自然に（マナス、ブッディ、チッタ、アハムカーラ）内部の感覚を抑えられるようになる。この方が楽にできる。神様に対する愛が深くな

るにつれて、五官の快樂は味が薄くなってくる。

子供が死んだ日、悲しみに沈んでいる夫婦は、肉体の快樂のことなんか考えてもみないだろう?」
一人の信者「どうすれば、神様が好きになれるのでしょうか?」

〔称名こそ偉大な行——方法は大実母の名〕

聖ラーマクリシュナ「あの御方の名を称えれば、罪なんかみんな消えてしまう。色欲、怒り、そのほかいろんな欲もみんな逃げていってしまふ」

一信者「どうしたら、あの御方の名を称えるのが好きになれるのでしょうか?」

聖ラーマクリシュナ「一生懸命になってあの御方にお願ひするんだよ、称名が好きになれるように、と言つて。あの御方は必ず目的を叶えて下さるよ」

こうおっしゃつてタクールは、世にも稀な神々しい声でお歌いになる。衆生の苦しみに同情して、大実母のもとに心の悩みを訴えておられるのだ。世間一般の人々の有様をご自身のことのように表わして、大実母にかねらの苦悩を訴えておられるのだ——

母なるシャーマよ

他の人に罪有罪はなし

自ら掘りし井戸のなかで

我は溺れて死ぬばかり

六つの情欲をツルハシとして

聖きこの土地に穴を掘り

穴より湧き出し水の色の

黒く妖しく しかも美し

救いの女神よ おん母よ

三つの性さがより悪しき性さがを

出せしはすべて己がが罪とが

如何にしてこれを防ぎ得しや

絶え間なくかい出すも もはやせんなく

腰より胸にと のぼり来る水に

この生命尽きんとす 母よゆるしたまえ

我に御目を注ぎ 母よ救いたまえ

六つの情欲——色欲、怒り、貪欲、高慢、嫉妬、
愛着

1883年4月8日(日)

つづけて、次の歌をおうたいになる。世の人びとの^{せんもう}譎妄狂乱の病！あの御方の名をよぶことが好きになれば、自然と狂いは静まっていくであろう――

この恐ろしき錯乱^{ごま}の病を

恵みの御足もて蹴散らし給え！

はかなき名譽は体をさいなみ

罪の後悔^{おもい}に気もそぞろなり

富と人を貪る心捨てずして

いかで わが魂 救わるべきか

むなしき饒舌 悪意のたわこと

ああ われ 長き日を無駄^{あだ}に過しぬ

まぼろしの世の浅き眠りに

おろかにも 両の目をふさぎて

嫉妬の虫は はらわたに寄生し

錯誤の渦巻きに 氣も萎え果て

君の御名を 聞くも厭わし

ああこの病 いつの日かいやさる

聖ラーマクリシュナ「君(神)の御名を聞くも厭わし！ 病氣もここまでくれば、なかなか治る見込みはないね。ほんのチョッピリでもあの御方に関心があれば治る希みは大きいにある。だから神様の名に興味を持って！ 神様の名を称えないとダメだ。ドウルガーでも、クリシュナでも、シヴァでも、どんな名前でもいいから、とにかく呼んでみる！ 御名を念じて日増しに慕わしさが強まり、そして、心に喜びが湧いてきたら、もう怖いものなんか何もないんだ。錯乱の病なんか吹っ飛んでしまふよ。あの御方の恩寵は絶対にいただけるよ」

〔心の信仰と見かけの信仰——神は心を見る〕

「得るものは自分の心次第だ。二人の仲間が道を歩いていた。ある場所でバーガヴァタの朗読をやっていた。一人が、『ねえ、行って、ちよつとバーガヴァタを聞こうよ！』と誘った。だが、もう一人はちよつとのぞいただけで出て行き、売春宿(娼家)に入ってしまった。ところが、そこでしばらく過ごしているうちに、何だかとてもイヤな気がしてきた。かれは独り言をいった。『恥ずかしいなあ！ 友だちは神さまの話を聞いているというのに、自分はいったいどこにいるというんだろう！』一方、バーガヴァ

タを聞いていた友だちもイライラしていた。「ああ、何て私はバカだろう！ ビヤールビヤール青鷲あおさぎが啼ないてるようなつまらん声を聞くために、こんなとこに坐っているとは！ 友だちはさぞ、いい思いをしてるだろうなあ！」この二人が死んだとき、バーガヴァタを聞いていた男は死王ヤマの闇の国に連れていかれた。娯家に行った男はヴィシユヌ大神が住んでいる天国の御殿に連れていかれた。

至かみ聖さまは心をご覧になる。どんな仕事をしていたとか、どこに居たとか、そんなことはご覧にならない。ジヤナルダナ(タリシユナ)は人の心を知り給い、人の心を受けたもう。

カルタバジャ派ではマントラを授けるときに、いざ、心を君に、という。つまり——今からは、すべてのことはお前の心にかかっている、ということだ。

この派の人たちはこういう——心正しくあればその行いも正しく、その得るものも正しく。

心のもつ力でハヌマーンは海を飛び越えた。私はラーマの召使いだ。私はラーマの名を称えている、この私に出来ないことがあるか！ この信念だよ」

「なぜ見神できないか？ それは我アハム意識のため」

「我執アハムカラのあるあいだは無智だ。我執のあるうちは真の自由はない。」

牛はハムバー、ハムバーと啼なくし、山羊はミヤール、ミヤールと啼く。だから、あいつらの苦勞すること！ 切られて皮をはがれる。靴やスリッパにされて履かれる、タイコの皮にされて叩かれる。苦勞のしつ放しだ。ヒンディー語で「ハム」はワタシという意味だよ。それに「ミヤールエ」というのも

ワタシという意味なんだ。ワタシ、ワタシ」と言いつづけているからあんな目に遭うのだ。さいごに血管で木綿をさらす皮ひもにされる。こうなると、皮ひもが人の手に扱われるとき、トッフ、トッフ、つまり、あなた、あなた」と音を出す。これでやっと救われる！ もう苦しまないですむ」

「ああ神様、すべてをなさるのはあなたで、決して私じゃありません。これが智慧というものだ。

低くしていれば高く上げれる。チャタク鳥は低いところに住んでいるが、それでいてたいそう高く舞い上がる。高い土地では作物がとれない。土地に溝を掘ると水が集まってくる。すると作物ができるようになる」

〔在家者は修行者と交わることが必要——ほんとうに貧しい人とは？〕

「少しくらいのことは辛抱してでも、修行者と聖なる交わりをしなくちゃダメだよ。家ではたいいてい、世俗の話だけしかならないからね。病気に取りつかれているようなものだ。オウムは籠の中にいると、ラーマ、ラーマなんて人真似をして鳴いているが、森に放されると元のようになり、キエーツ、キエーツと鳴くよ。

金を持っているだけで裕福とは言えない。裕福な家だという一つの特徴は、どの部屋にも明かりがついていることだ。貧乏人は油を十分に買えないから、そんなにたくさん灯火をつけることができない。この大切な身体のお宮を暗いままにしておかないで、智慧のランプをつけてやらなければいけないよ。

智慧のランプを部屋につけて、ブラフマイー(母なる神)の顔を拝むんだよ」

〔祈りの原理——靈性に目ざめた人の特徴〕

「誰でも智慧が得られる。個別靈ジリアトリーバライティーと至高靈ハイエスパーとがあつてね、祈ることによつてすべての個靈はあの至高靈と一体になれるのだ。どの家にもガス栓がつけてある。ガス会社からガスがくるようになっていくのだ。申し込め！ 申し込みさえすりゃガスをよこす手配をしてくれるだろう。部屋に明かりがつくだろう。シアールダハに事務所オフィスがあるよ（一同笑う）。

ある人たちは靈に目覚めている。こういう人たちには特徴しるしがある。神についての話ばかり聞きたがつて、ほかの話にはさっぱり興味がなない。神についての話ばかりしたがつて、ほかの話をするのは気がすすまないのだ。七つの大海と、ガンジス、ヤムナーの河に水があふれていても、チャタク鳥は雨水を欲しがる。喉が灼けるように渴いても、他の水を飲もうとしないのだ」

ラームラルたちの讃歌と聖ラーマクリシュナの三昧境

タクル、聖ラーマクリシュナは、誰か歌をうたうようにとおっしゃった。ラームラルとカーリー殿に仕えるバラモンの役僧が歌った。歌の合間にバンヤを打ちながら——

（訳註、バンヤ——左手で打つ低音の出る太鼓）

（歌）わが胸のプリンダーヴァンに

いざ住みたまえ 主なるヴィシュヌ

わが熱き信仰と愛は

ヴィシュヌ——原文はカマラバティ||クリシュナ

ラーダーとなりて君に仕えん

解脱を求むるわが希いは

君をとりまくゴープイーの群れ

この身体は養父^{ちち}ナンダの家

やさしき心は養母^{はは}のヤシヨード

わが胸の罪の丘なる

ゴープアルダナを取り去り給いて

カンサより来し色欲などの

六つの煩惱を現^{いま}下に滅し

慈悲の笛を吹きならして

心の乳牛を手なづけつつ

とどまり給えわが胸の牧場に

希くは 希くはとどまり給え

六つの煩惱——色欲、怒り、貪欲、高慢、嫉妬、
愛着

1883年4月8日(日)

わが愛はヤムナーのほとり
わが希望はバンヤンの樹蔭^{こかげ}
なつかしき故郷にくつろぎ給いて
永くこの地に住み給えかし

牛飼いの愛にほだされ
ヴラジャの牧場にとどまり給えば
この愚かなる牛飼いは
主よ 君のしもべとなりて仕えん

(歌)

新しく湧き出づる雲間に
さし昇るクリシユナの月か
竹笛にくちびるよせて
その笑みに世界は明るし

身にまとう黄なる衣装は
電光^{いなづま}とまばゆく光り

この歌は、養父ナンダの家にすみ、ヤムナーのほとりで乙女たちとあそぶクリシユナをうたっている

足どりは力にあふれて
胸もとにゆれる野の花

気高き乙女の群をしたがえ
ヤムナーの岸をあかるく照らす
ナンダの家の尊きひとは
月よりもなお勝るかに見ゆ

浅黒く雄々しき美丈夫
胸ふかく貫き入りて
乙女らの生命と知恵を
笛の音にて奪い去りたり

この憐れなる物語りを
ガンガーナーラーヤナは誰に伝えん
水汲むとヤムナーの岸辺に
君ゆかばすべて知るべし

美丈夫——美貌の若者

(歌) シャーマの御足もと大空たかく

わたしの心の凧は天翔けていた

よこしまな風をまともにもうけて

急にかたむいて落ちてしまった

一八八三年三月十一日に全訳あり

〔見神の方法は？ 熱愛アスラীগ、ゴビーのような情熱、虎のような情熱〕

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに向かつて) 虎がガブリガブリと獲物を食い尽くすように、ク求神情熱の虎クは色欲や怒りや、そのほかの敵どもを食い尽くしてしまう。いったん神様に対する情熱が燃え上がったら、もう欲もカンシヤクもいられなくなる。牛飼ゴい乙女ビたちはこういう状態になつていたのだよ。主クリシュナへの情熱だ。

それから、ク情熱の目薬クというのものもある。シユリ・マデー聖女(ラーター)はおっしゃった。「ねえ、お友だち、私には至るところにクリシュナの姿が見えるのよ！」女友達は答えた。「あなたは情熱の目薬を目に塗つたから、そんなふうに見えるのよ」と。蛙の頭を焼いてつくつた油ぐすりを目に塗ると、あたり一面にヘビが見えるそうだよ！

女と金にはかりかかづらつて神様のことを考えたこともないような連中、こういう連中は鎖につながれた生者いまわだ。こんな連中に偉大な仕事ができるかい？ カラスにつつかれたマンゴーみたいなもの

で、神前に供えることはおろか、自分で食べるのさえどうしようかと思うだろう。

縛られた魂は蚕かいこのようなもの。その気になればマユを食い破やぶつて出てこられるものを、自分でつくった住居なものだから、執着があつて出てこられない。そして、そこで死んでしまう。

自由になった魂は、決して女と金に使われぬ。蚕かいこのなかにも、自分でつくり上げた大切なマユを食い破やぶつて出て来るやつもあるんだよ——ほんの一匹か二匹だがね。

みんな、現象マヤに迷わされているのだ。一人か二人が真の智慧をもつ。かれらは現象マヤに迷わされない。女と金に支配されない。産室にあつた灰を入れた壺かじのかけらを足につけたら、ダム、ダム、ダムという魔術師の呪文も、何の危害も加えることは出来はしない。だって、魔術師が何をしているのか、はっきり見えるんだから——。(訳註——インドでは、産室で湯沸かしなどに使った牛糞を燃やした灰を入れる壺は出産が終わると割やぶつてしまうが、その壺のかけらを魔除けのお守りとして身につける習慣がある)

修行サダナ完成者と恩寵クラパ完成者とがある。大へんな苦勞して畑に水を引いて、やつと作物をつくる百姓もある。そうかと思うと、水を撒まかなくても雨水で間に合う百姓もある。苦勞して水を運んでこなくてもいいのだ。このマヤーの手から逃げだすためには、骨を折やぶつて修行をしなければならぬ。ところが、恩寵クラパ完成者は何の苦勞もいらぬんだよ！ だがそれは、ほんの一人、二人だ。

それから永遠ニテイヤの完成者——これは、生まれながらに智慧を具えて靈的に目覚めているうちに、その泉のようなものだ。作業員があつちを掃除したりこつちを片付けたりしているうちに、その泉のところがひよいと片付けると、ビューツとばかり水が噴き出てくるんだよ！ 永遠ニテイヤの完成者の神に対

1883年4月8日(日)

する情熱の最初の現れを見て、人々はびつくりする。そして、こんな信仰バクテ、ザファイラ、キヤと離欲の精神が、はじめからどこにあったのだろう、と不思議がるのだよ」
「タクールは、クリシユナを慕った牛飼ゴい女ビたちの霊的情熱についてお話しになった。再び歌が始まり、ラームラルが先ずうたった。

主よ！ きみは我がすべてのすべて

わが命の命 わが髓の髓

この三界に君をおきて

我がものと呼ぶものはなし

きみは我が喜び わが安らぎ

わが支え わが力 わが智慧

きみは我が住みか 心地よきところ

最愛の友よ わが骨肉よ

きみは我がこの世の生命 きみは我が救い

きみは我が来世の生命 きみは我が天国

きみは我が聖者、わが規律、慈悲ふかき師ブル
限りなく湧き出ずる幸福の泉よ

おお 君は我が道 わが終の目標ついでめあて
慕わしき救い主 おお 君はわが秘仏かみ
君 頼もしき父 やさしき母 わが舟の舵をとり
世の荒海こえて 彼岸に渡し給う

聖ラーマクリシュナ、信者たちに向かつて――

「ああ、なんといういい歌だろうねえ！ きみは我がすべてののすべて！ 牛飼ゴい乙女イビたちはアクルーラ
(クリシュナの叔父)がクリシュナを連れにきた時、ラーダーにこう言った。『ラーダー！ あんたの大
切な宝物(クリシュナ)を盗みに来たわよ！』この愛だよ。至聖かみさまのためにこんな燃えているんだよ」

再び歌はつづく――

(歌) つかむな つかむな この車

馬車は車で動くけど

馬車の主あるじは 神さまよ

この歌は、アクルーラと一緒にマトゥラーに
行こうとしているクリシュナの乗った馬車を
止めようとしているゴービー達をうたった歌

車がまわって世界は動く

(歌) おお 親しき友よ

その心を込めた花輪は誰のため

歌を聞かれながら、タクール、聖ラーマクリシユナは深い深い大三昧海に没入なさった！ 信者たちは驚いて、ただ唯、タクルの様子に見入っている。物音ひとつしない。タクルの入三昧境である！ 手を合わせて坐っていらつしやる様子は、ちょうど写真を見ているようだ。ただ両の目の外側のすみから歓喜の涙が流れ落ちている。(訳註——目の内側のすみから流れる涙は悲しみの涙で、外側のすみから流れる涙は歓喜の喜びの涙であるとタクールはおっしゃっていた)

〔神との対話——聖ラーマクリシユナの見神ダルシヤン——クリシユナが至る処に見える〕

しばらくの後、タクールはやや平常に戻られた。だが、三昧中にお会いした御方と何か話をしていらつしやる。ことばの端々だけが信者たちの耳にもとどく。タクールは独りごとを言うように話していらつしやるのである。「あんたがわたしで、わたしがあんた。あんたが食べる、わたしはあんたは食べる！ ……いいようにしてるよ」

「黄疸おうだんにかかったかな。そこら中にあんたが見えるよ！」

「クリシユナ！ おお、貧しき者の友なる神よ！ いとしき恋人よ！ ゴーヴィンダよ！」
恋人よ！ ゴーヴィンダよ！ こうつぶやきながら再び三昧状態になられた。部屋の中は静まりかえっている。信者たちは熱心に、タクール、聖ラーマクリシユナの姿を何度も何度も飽きることなく見つづけている。

聖ラーマクリシユナの口から神のメッセージ

〔アダル・セン氏、二度目の会見——在家の人々への教訓〕

聖ラーマクリシユナは三昧状態で小さい方の木製ベッドに坐っていらつしやる。信者たちはその回りを囲むようにして坐っている。アダル・セン氏が数人の友人を連れて入ってきた。アダルは治安判事代理である。タクールにはこれが二度目の会見である。アダルの年齢は二十九から三十の間。アダルの友人サーラダーチャランは息子を亡くして悲嘆にくれていた。彼は監視学官だった。引退した後は瞑想と祈りに日を送っていた。長男を失った悲しみをやわらげる方策がたないでいた。それでアダルは、タクールのことをきかせて、ここへ連れてきたのである。アダル自身も、もう一度タクールに会いたい気持ちがあったのである。

三昧境から出られたタクールが目を開いてご覧になると、部屋中の人々が自分の方を見つめている。このとき、この御方は何ごとか独りごとを言われた。

神がこの御方の口を通して何かを話され、教えを下さるのであるか？

聖ラーマクリシュナ「世俗の人でも、時々、智慧が見うけられる。時たまローソクの火のような心細い明かりが見える。いやいや、太陽の一筋の光線のようなものだ。小さい穴から光線が入ってきている。世間の人の称名には熱心さが無い。子供が、神仏に誓って、なんて言ってるようなものだ。叔母さんたちの口げんかをきいて、神仏に誓います、なんて言葉を覚えるんだよ！」

世間の人々には根性がない。出来ればそれでいい、出来なけりやそれまで。水が要るから井戸を掘る。掘っていくうちに石にあたるとすぐその場所をおっぽりだす。又、別な場所を掘って砂の層に突きあたる。ただ砂が一時出てきただけなのに、そこもまた投げ出す。掘り始めた場所をずっと掘りつけてこそ、水が出てくるのに……。

生者はみな、自分の蒔いた種の果実をうけとる。だから歌にあるだろう——

母なるシャーマよ 他の人に罪はなし

自ら掘りし井戸の中で

私は溺れて死ぬばかり

私と私のものが無智だ。よくよく考えを押し詰めていくと、その、私、私、といっているものはあの御方、つまり、真我のほかの何者でもないと感じるだろう。よく分別しなさいよ。あなたはその肉体か、それとも骨か、筋肉か、それともまた他の何だね？ わかるだろう、あなたはそのドレでもないんだよ。どんな限定(ウバーテイ)もないんだ。そこで念のためだ、いいかい——私は何もしてない。私のアヤマチなぞというものはない。属性もない。罪もなければ手柄もない。

これは金、それは真鍮——こういうのが無智。何もかもすべて金——これが智慧」

〔見神の特徴。聖ラーマクリシュナは神の化身か？〕

「神を見たならば、あれこれ考えられなくなる。だが神をつかんだ後でも、いろいろ考えつづける場合もある。信仰をもって称名したり讃神歌をうたっている人もある。

子供はいつまで泣いているかね？ 乳房に吸いつくまでだ。その後はもう泣き声は止む。ただ機嫌よくしているだけ。うれしがって母親の乳を飲んでいるだけ。とは言うものの、乳を飲みながら時々やめて遊んだり、キャツキャツと笑ったりもするさ。

あの御方がすべてのものに成っていらつしやる。けれども、あの御方は人間にいちばんよく頭れている——穢けがれを知らぬ幼な子の性質のなかに。笑つたり、泣いたり、踊つたり、歌つたりしていると、あの御方は現前していらつしやる」

〔子を失つた悲しみ——人よ、いざ戦え〕

タクルは、アダルの様子を尋ねられた。アダルは、彼の友人が子を失つて悲しんでいることを申

（訳註）ウバーデイ——肩書きや称号など、無智のためにアートマンの上に重ねられた限定。例えば——私は学者だ、私は何某の息子だ、私は金持ちだ、私には身分がある。——これによって俗世間に縛られている。

上げた。タクールは独り言のように歌を口ずさまれた――

人よ いざ戦え

死(時)は汝が家に攻め入らん

信仰の馬車にのり 智慧の矢筒をもち

舌の弓を握り 愛をこめて

梵の女神の名なる矢を 敵に向けよ

ガンジスの岸辺より 神の名を放つは

世の常の 戦車も兵も要らずして

これはこれ 滅敵常勝の計略なり

何ができる？ 死のために用意じゅんびしておかなけりゃならんだ。死が家に入ってくるから、あの御方の名を武器にして戦わなけりゃいけない。あの御方だけが行動者なのだ。だからわたしは言うんだよ。させる通りにわたしはする、言わせる通りに言う。わたしは道具で、あんたが使い手。わたしは部屋で、あんたが住み手。わたしが馬車で、あんたが御者だと。

あの御方に代理権を渡してしまえ！ いい人に一切を任せてしまえばしくじることはないからね、あの御方の思召し通りにすることだ。

悲しいのは当り前だろう？ 自分の生んだ息子だもの！ ラーヴァアナが死んで倒れたとき、ラクシユマナがかけよって見た。骨はどこもかしこも穴だらけだ。彼は叫んだ。『ラーマ！ あなたの矢はすばらしい！ ラーヴァアナの身体は至るところ穴だらけですよ！』すると、ラーマは答えた。『骨まで穴だらけなのは私の矢のせいじゃない。悲しみが彼の骨をザクザクにしたのだ。その沢山の穴は悲しみの印なのだ。息子たちを失った悲しみで骨が裂けたのだ』と。

とは言うものの、この世のものはすべて無常だよ。家も、女房も、子供も、ほんの束の間のものだ。ヤシの樹だけがほんとうにある。一つ、二つ、実が落ちただけだ。なぜいつまでもメソメソしているんだい？

神様は三つの仕事をなさる。創造と、維持と、破壊だ。だから死滅ということもあるさ。破壊の時はあらゆるものが壊れて何一つ残らない。宇宙の大実母は創造のタネだけを集めてとっておいて下さる。そして又、新しい創造の時にはそのタネをお蒔きになる。おかみさん達が持っている薄汚れた小物入れの壺みたいなものだ（一同笑う）。あの中にはカボチャの種だの、貝ガラだの、青い色した丸薬だの、こまごましたものを寄せ集めてしまつてある」

アダルへの教訓——死は目前にあり

タクールは北のベランダで立たれたまま、アダルと話をなすつておられる。

聖ラーマクリシュナ「（アダルに向かって）あんたは代理治安官だ。その地位だつて神様のお恵み

でなれたのだよ。あの御方を忘れちゃいけない。だが、よく心得ておきなさいよ。全ての人はみんな同じ一つの道をいかなければならんということをね。ここ(この世)にはほんの僅かの間いるだけだ。

世間は仕事の場所だ。ここは仕事をしに来るところだ。ちょうど郷里くわに家屋敷があつて、カルカッタへ出てきて仕事をするようなものだよ。

だから、仕事をする必要があるだよ。それが修行だ。早いとこ仕事をし終えてしまふことだ。細工師が金を溶かす時には、炬だの、大ウチワだの、管くだだの、要いるもの一切そろえて、強い火をおこして金を溶かす。金を溶かした後で、傍の人にタバコの支度を言い付ける。いままでオデコに汗をしたたらせていたんだ。その後でタバコを吸うのさ。

腹をくくらなけりゃいけないよ。それから修行だ。固く固く決心すること！

あの御方の名の種は大へんな力がある。無知無明をなくしてしまふ。種子はこんなに小さくてかわいらしい、新芽も実に柔らかだ。それなのに堅い土を破るんだよ。土は砕けて道をあけるんだよ。

女と金のなかで暮らしていると、心はいい加減にクタビレてしまふ。気をつけなければいけないよ。出家はそれほど心配することはない。ほんとの出家というのは、女と金から離れて住んでいるからね。だから、修行の際も神様にいつも心を集中していられるのだ。

ほんとうの出家——あの人たちはいつも心を神様に捧げて、ミツバチのように花にだけ止まって蜜を吸う。世間の女と金のなかにいる連中も、神様に心を向けることはできる。だが、また時々、女と金のことも考える。ハエが菓子(サンデシユ)の上に止まったり、傷口に止まったりするようなものだ。

うんこの上にも止まったり——。

神様の方にいつも心を向けていなさい。初めのうちはちよつぱり辛いかもしれんが、後で恩給がも
らえるよ」

〔原典註〕アダル・ラール・セン氏はこれから一年半後に亡くなった。その知らせをお聞きになったタクールは、長い間大実母カーリーの前で泣いておられた。アダルはタクールのすぐれた信者であつて、タクールはいつも、『あんたはわたしの身内だ』とおっしゃっていた。アダルの家はカルカッタ市シヨババザール、ベネトラ（商店地区）にある。彼の数人の令嬢たちは在世しており、カルカッタの家にはシャーマラル、ヒーラルル氏をはじめ、兄弟たちの誰彼が住んでいる。その家の広間（応接間）と禮拜堂は巡礼の場所となつている。